

言葉を科学する：人間の再発見

Day 15 ちょっとだけ feedback

・Q: 子どもに対する実験というのは、大きな目的は何であり、いつ頃からされてのだろうか？

* 言語能力に限らず、子どもの成長（発達）の調査研究には、古い歴史があると思います。言語能力に限って言えば、子ども語彙獲得、単語の意味の認識に関する研究は1970年代以前からあったと思います。一方、授業で紹介したようなある程度複雑な文法能力に関する調査を行う truth value judgment task や elicited production task などは、1980年代以降のものであると思われます。ちょうどそのころ、生成文法理論の「第二の概念転換」(Term paper [B]の文献を参照してください) が起こり、具体的な文法理論にのっとった研究が急速に盛んになりました。

・Q: 子どもに対する質問の仕方によって、実験結果が変わってしまうのなら、実験データの信憑性は果たしてどのくらいあるのだろうか。

* これはとてもよい質問ですね。どのような仮説を立てて、どのような方法（この場合、たとえば「質問の仕方」）で実験調査を行うのがよいのかを考えるのが研究者の重要な仕事です。信頼できるデータをいかにして得るのが、実験研究の大きなポイントであり、研究者の腕の見せ所でもあります。良い方法を開発すれば、それだけで同業研究者から評価されますし、逆に、実験方法に欠陥があれば、それをデータとして論文を書いても、批判を受けることになります。このようなことを繰り返して、実験の目的に見合ったよりよい方法を分野全体で、よくしていく努力を積み重ねているのです。このことは、実際に実験や調査によって、データを得るタイプの研究であれば、どの分野のどの研究にも当てはまる ことです。論文を書く際に実験・調査の手順や方法を事細かに書くのは、それも含めて研究として評価されるからです（結果・結論だけではだめ）。このことは、いわゆる「文系」といわれる分野であっても、何らかの調査をする場合には、全く同じこと です。たとえば、何らかの社会調査（たとえば、「アンケート」）を行い、それによって得られた情報をデータとして利用する場合、その調査方法（「アンケート」の項目の設定のしかた、調査対象の選定の方法など）は、得られたデータそのものの分析以上に重要になってきます。調査方法がしっかりしていれば、仮にその分析結果が意外なものであっても、その論文はその分野の研究者共同体に受け入れられますし、調査方法に不備があれば（たとえば、「アンケート」の項目設定の方法が十分に練られていないなど）、その分析結果がどのようなものであれ、その論文は、その分野の研究者共同体からは評価されません。

・Q: たとえば、第二言語としてその言語を学んでいる人々に対して、その能力ごとに、子どもの母語獲得と同じ実験をしたら、差が出るのだろうか？

* 興味深い質問ですね。日本語を母語とし、英語を外国語として学んでいる高校生や大学生を対象にいろいろなタイプの研究（調査・実験）がされています。どのような能力を調べるのか、あるいはその対象学生がどのくらい英語ができるか、などによっても結果は変わってくるようです。ある項目に関しては、英語を母語とする子どもの言語獲得と同じような経過をたどるものもあり、また、別の項目に関しては、英語を母語とする子どもとは

異なる経過をたどるものもあるようです。どの点と同じでどの点が異なるのかを丁寧に調査することによって、人間の言語能力の生得的な側面や input の役割などを明らかにすることに繋がる可能性があると思います。

・Q: 「いつ男の子はケガをしたと言いましたか?」という質問に対して、「お風呂に入っているとき」はすぐにわかったが、「木から落ちたとき」は少し考えてからわかった。どちら解釈が先に出てくるのか（出やすい解釈なのか）ということも、ある程度きまっているのでしょうか。

* これは、この文を読んだ人が（頭の中で）どのような音調・イントネーションで読むかやその時の心理状態など、様々な要因に左右されると思われます。一般的には、この例のように、「いつ」が文頭にある場合は、主節の述語「言いましたか」と結びつける解釈の方が思いつきやすいかもしれません。

・Q: 文法は領域固有的であるという仮説について、授業では(32)の受動文についてのみあつかったが、他の事例が示されなければ、不十分だと思う。

* その通りです。授業で紹介した事例だけでは、不十分なので、この仮説の確からしさを高めるためには、受動文に関わる機能語以外のさまざまなタイプの機能語の働きが、文法的失語症 (agrammatic aphasia) の人たちで、どのようになっているかを丁寧に調査していかなければなりません。

・Q: お皿とコップを選ばせる実験の例で、「お皿」という名称は知っているが、コップという単語をまだ知らない子供に、「コップをもってきて」というとどのような反応をするのでしょうか?

* とてもよい質問です。2つのものから1つを選んでもらうタイプの act out task では、一方の名前をよく知っていて、他方の名前を知らない（と思われる）場合に、聞いたことがない名前のもを持ってきてと言われると、名前を知らない方のものがそのように呼ばれるのだろうと推測して、それを持ってくる場合が多い、という実験の報告があります。

(Heibeck & Markman 1987. *Word Learning in Children: An examination of fast mapping, Child Development 58, 1021-34.*)

・Q: ビデオの中で女の子が男の子に影響されて自分の考えを変えてしまったところがあった。この場合は1対1の実験にするのが良いと思うが、集団での実験は本当に意味がないのか、何か使い道はないのかと思った。

* 良いポイントですね。たとえば、2名（あるいはそれ以上の）子ども（大人でも良い）のこたばを用いた相互作用を調査する場合は、集団での実験、ということになると思います。何を明らかにしたいのか、どのような方法がそれにふさわしいのか、はその研究・その実験ごとに考えていく必要があります。これも、どの分野のどの研究でも同じですね。

<以下、質問ではありませんが、宿題に対して、とてもよいコメントがたくさんあったので、いくつか紹介します>

・失語症になった人のような機能語が理解できない状態がどのようなものであるのか、健常者には普通わからないとあった。もしかすると、聞く方に関しては、少しわかる程度の外国語を早口で言われた場合などは、内容語しか聞き取れず文法がわからなかったりするので、似たような感覚なのかもしれない。

・実験はやり方を工夫するだけで、結果が大きく左右される。これは子供を対象とした実験だけに限定した話ではないと思う。われわれ人間はもちろん、その他の現象を対象とする場合でも、実験方法というのは非常に重要であるためよく考え、仮説をしっかりと立ててからやる必要があると思った。

<2つの解釈が可能な場合、1つの解釈しかできない場合>

・「いつ、男の子はケガをしたと言いましたか？」は、なぜ2種類の解答がかのうなのか？

(1) 木から落ちた時、(2) お風呂に入っている時

*この文は、[_{x1} 男の子は [_{x2} …]と言いました]という、大きな[文1]の中に、[_{x2} ケガをした]という文が埋め込まれています(いわゆる複文)。それ全体を、「いつ … か？」という時をたずねる形式が囲い込んでいます。このような場合、この「いつ」という表現は、(a)のように[文1]の述語「言いました」と結び付けられる解釈と、(b)のように[文2]の述語「ケガをした」と結び付けられる解釈との二通りが可能です。

- (a) いつ、[_{x1} 男の子は [_{x2} ケガをした]と 言いました]か
- (b) いつ、[_{x1} 男の子は [_{x2} ケガをした]と言いました]か

聞き手が、(a)の意味だと解釈すれば、「お風呂に入っている時」という回答になりますし、(b)の意味だと解釈すれば、「ケガをした時」という回答になります。実際の会話では、前後の文脈や、話し手のイントネーションなどで、どちらの意味で話し手が言っているか、分かる場合も少なくないと思いますが、誤解が起こる場合もあります。なお、「どうしても」が加わると、(c)タイプの解釈しかできなくなり、(d)タイプの解釈が不可になるため、「お風呂に入っている時」という答えが自然になり、「ケガをした時」という答えが、不自然になります。

- (c) いつ、[_{x1} 男の子は [_{x2} どうして ケガをした]と 言いました]か
- (d) いつ、[_{x1} 男の子は [_{x2} どうして ケガをした]と言いました]か

(d)では、「どうしても」の存在が、「いつ」を「ケガをした」と結びつける解釈をブロックしているから、というのが一般的な説明です。